

勝林寺寺報

報恩講といふこと



今年もまた、報恩講の季節になりました。ご門徒それぞれのご家庭で、この報恩講をつとめていただきます。報恩講とは、恩に報いる講（つまり）といふことで、その昔、親鸞聖人が亡くなられた後、三十三回忌の時に、親鸞聖人の徳をたたえ、その恩を感謝する意味で、はじめて報恩講が営まれたといわれます。それ以来、京都の本願寺をはじめとし、全国のお寺と、「門徒の家庭で、それぞれつとめられるようになつたわけあります。だからこの報恩講とは、七百年余りの長い歴史をもつて今日に伝えられている、浄土真宗独自の仏事であります。この恩といふことは、もともとインドの人々の考え方によるもので、仏教が教えてくれたものであります。

この恩とは、インドの昔の言語では、「クリタジユナ」といいますが、その「クリタ」とは「為されたる」「作られたる」ということで、「ジユナ」とは「知る」という意味であります。だからこの「クリタジユナ」とは、眼には見えないけど、私たちのために、「為されたもの」「作られたるもの」を心に深く知ることをいいます。そのことを日本の言葉では「おかげ」と申します。陰になつて見えないけれども、私たちのために加わつておられる力が「おかげ」であります。私たちには、時にはこのような「恩」「おかげ」について、深く思うべきであります。

自分の顔に責任をもて

先日、映画「寅さんシリーズ」で有名な山田洋次監督と、しばらく話し合う機会がありました。そのとき、山田さんは先日亡くなった俳優の笠智衆（りゅうちしゆう）さんの顔がとてもよかつたと仰っていました。この人は身体よりも、顔で演技をしていましたというわけです。たいていの人なら、俳優の笠さんの顔は、映画やテレビの画面をとおしてご承知だと思いますが、それはいささか哀愁をおびて、しかもまた、ほのぼのとした洒脱さをたたえたところの、いい顔でした。

人間の顔については、中国では古くから人相学ということもいわれて、人の顔のありようを問題にしてまいりました。有名な黄山谷（こうさんこく）という人は、「三日書を読まざれば面貌にくむべく、語言あじなし」と申しております。三日間も教えを説いた本を読まないでいると、顔が下品になり、その言葉も味がなくなるという意味でしよう。くだらない書物ばかり読んでいたり、低俗なテレビばかり見ていたら、その人の人相が悪くなるというわけです。

かつてアメリカの大統領リンカーンに、ある人がぜひ使うようにとすぐれた人物を紹介しましたが、リンカーンがいつこうに使わないのでなぜかと尋ねたところ、リンカーンは、あの人は顔が悪いからダメだと言つたという話があります。そしてそのときに、リンカーンが「人間四十歳をすぎたら、自分の顔に責任を持つべきだ」といったという話は有名であります。私たちも、お互いに自分の顔に責任をもつて生きたいものです。（信楽峻磨遺稿法語集より引用）

「」案内

報恩講法要をお勧めいたします

阿弥陀様の温かいまなざしに見守られながら、暖かいストーブの周りに寄つて、皆で報恩講をお勧めいたしましょう。美味しいお齋を用意して、お参りをお待ちしています。

第一日目
十一月二十一日（土）



一七時半より お齋（都合の良い時刻に
お越しください）

一八時半より ご伝鈔拝読

一九時半より お勤め「正信偈文類節」

二〇時一〇分 法話

ご講師

但東町乗専寺住職
本多龍典師

二七日（水） 口栗尾 報恩講
二九日（日） 関森敏昭宅 忌明法要
三〇日（月） 日殿・保谷 報恩講
みのりを聞く会

第二日目
十一月二十二日（日）

十時より お勤め「阿弥陀経」

十時五十分 法話

ご講師*一日目に同じ

十二時より お齋

（敬称略）

十一月 勝林寺 予定

一日（日） 岩上悟宅 三回忌

六日（金） 正福寺 報恩講

七日（土） 宮島重喜宅 三・七回忌

八日（日） 岡野隆宅 一周忌

十四日（土） おみがき 清掃奉仕

西方寺 報恩講

十五日（日） 福成寺 報恩講

十六日（金） 勝林寺 報恩講

十七日（土） 勝林寺 報恩講

十八日（日） 勝林寺 報恩講

十九日（月） 西宗寺 報恩講

二十日（火） 神戸別院二〇周年 団体参拝

二十一日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十二日（木） みのりを聞く会

二十三日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十四日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十五日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十六日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十七日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十八日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

二十九日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十一日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十二日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十三日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十四日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十五日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十六日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十七日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十八日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

三十九日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十一日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十二日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十三日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十四日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十五日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十六日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十七日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十八日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

四十九日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十一日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十二日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十三日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十四日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十五日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十六日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十七日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十八日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

五十九日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（金） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（土） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（日） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（月） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（火） 佐田・奥栗尾 報恩講

六十日（水） 佐田・奥栗尾 報恩講

う
た

「うた」は、今の私には、あまり縁のないものになりました。幼い時には、童謡を歌つた覚えはあります。また、若い時には、仲間とワイワイ酒を酌み交わし、うたをうたつた記憶もないでは、ありません。学校では、百人一首や「古今集」なども学びましたが、九十を超えた今では、あまり思い出すこともなくなりました。

特に、古代の「うた」は、十二単のお姫様が、暇を持て余して遊んだもの、貴族の暇つぶしであり、庶民には、あまり縁のないもののように感じていました。

しかし、うたによって、華やかな歴史に隠れたり、庶民の暮らしの歴史が残されていることに今になって気づきます。例えば「梁塵秘抄」（後白河法皇撰）は、平安末期に編まれた歌謡集ですが、そこには、文字も書けず、教養もなくその日その日を這いずり回りながら、暮らしていた庶民のうたがおさめられています。梁（はり）の上にたまつた塵（ちり）あくたと思われていた人たち、つまり地方から年貢などを運んできただ男たちが、院の庭で一晩、もてなしの酒をふるまわれ、酔うほどに故郷のうたを歌いだします。それを、法王がそつと記録しておいたものだといわれています。また、さらにさかのぼつて、すでに、奈良時代には、「旋頭歌」「防人の歌」として、万葉集にも庶民のうたが収録されています。今回は、そのうちからいくつか拾い出します。

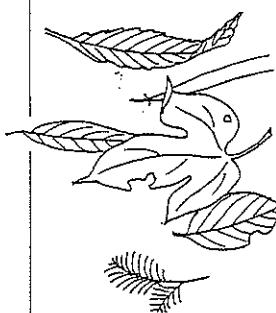
「わたしのいとし子、故郷においてきた。その娘ももう十歳そこそくなつたはず。親の真似して、すでに巫女として歩いているにちがいない。田子の浦には、藻塩をとるため、どんな荒くれ海人が集まっているかしらんが、そいつらが、わたしの娘に「お前、本物の巫女なのか。おまえの占いあたるのか」などと、問い合わせるが、わたしの娘に「お前、本物の巫女なのか。

古紙に廻して、また娘の筆で想作。——り——
も立つてもいられぬ親の切ない心情。拙い歌。
りだけに、余計その心根が痛々しい。

もう一首

遊びせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれ
れけん 遊ぶ子供の声きけば 我が身さえこそ
動（ゆる）がるれ

た庶民のうたがおさめられています。梁(はり)の上にたまたた塵(ちり)あくたと思われていた人たち、つまり地方から年貢などを運んできる男たちが、院の庭で一晩、もてなしの酒をふるまわれ、酔うほどに故郷のうたを歌いだします。それを、法王がそつと記録しておいたものだといわれています。また、さらにさかのぼって、すでに、奈良時代には、「旋頭歌」「防人の歌」として、万葉集にも庶民のうたが収録されています。今回は、そのうちからいくつか拾い出してみます。



(文責 前住職)

わが子は十余になりぬらむ
巫(こうなぎ)してこそ歩(あり)くなれ
田子の浦に多くむと

如何に海人(あまびと)
集まらむ

如來の本願は 称名念佛にあり

法語カレンダー十一月(乙卯より一部抜粋)

かみの本願は 称名念佛にあり

淨土真宗では阿弥陀如来＝阿弥陀仏＝南無阿弥陀
仏を「親」、「親せむ」と身近に表現する」とがよくあ
ります。衆生は私たち生きとし生けるもの。それは
わざといふ親子のようなもので、親は子むかに亥して
一緒に名のりをあげて、自分があなたの親ですか
親の存在 名前を呼ばせねばとします。まだ口も十
分にわけない折からじや。ペーとか、マヤとか、お父
さん、お母さんなど、血分がい名のりを呼ばせね
じます。やのつかい、この間にかくじゅわが「ペー」
「マヤ」と親を呼ぶようになります。初めて親の「」と
を直に出して呼んだ時、親にひととされまでの苦労
は一気に吹き飛び、感激のあまり子どもを強く抱
きしめるハンドショット。同じように私自身も、最初
から素直に「南無阿弥陀仏」と極えたわけではありません
ません。それがいつの間にか、何の抵抗もなく、自然
に口へ、声になつて出でてくださるようになりました。
「」がだんだん着くのに、どれだけ如来さまに心
配かけた」とか「母せむ」とはおれません。

西行法語の「なまくらの おわしますかは しらね
く も かたじけなし」なみだりせるの」の歌を題こ
出します。本当にかたじけなし」とです。

またお市さまは「わしが念佛となえる」やな
念佛の方から わ」の心にあたる念佛 南無阿弥陀
仏「といったことがあります。念佛の出で場所がないか、
口をとおして声になつて、なんなんだよ」と書いて出
た、お市さん。そこには雑行雑修血肉の「」ひせ
りません。(中略)回向は仏さまから私たちへの方
向であり、私たちからは不回向と示されています。
そのとくふをよく間違えておられる人が見受けられ
ますので注意したいのです。

「称名はござみの念佛なり。信のつくはうれしくござ
みて申す念佛なり」と、喜びいさんで称える仏恩報
謝の念佛ですよと教えておられます。藤実無縫

了すん

ためには、滋賀県の大津に行つてきました。でも、行きはバスで会場に乗り付け、帰りも横付けされたバスに乗り込むのですから、大津の「お」の字も感じることなく帰つてきましたけど(笑)せつかくいい縁をいただいたので、寺報を読んでくださる皆さんにほんの少しあおすそ分け。講師の先生が「私は『頑張る』という言葉がきらいです」とおっしゃいます。「え?」お話を聞くと、先生がまだお若い時の野球の試合でのことです。九回を迎えて、リードを許してしまったので、ホームランを狙つておられたのでしょうか。力一杯スイングしたところ、玉はバントに当たつたのですが、芯をとらえず、ファウルとなつた玉は、先生自身の右目を直撃しました。すぐに病院に運ばれたそうですが、玉は視神経をも傷つけ、先生の右目から光を奪いました。ひとときも止むことのない痛みに必死で耐えながら入院生活を送る先生のもとに、次々にお見舞いの方が来られます。そして、日々に「頑張って」と励ましてくださいる、悪気がないのは分かつていたが、「この痛みと苦しみに耐えている自分に、これ以上何を頑張れというのか」と思われたそうです。それ以来、先生は「頑張れ」という言葉が、きらいになつたのだそうです。ご自身のつらい経験から絞り出された言葉の一つが、とても心に響き、すとんと心に落ちました。私は、今まで『頑張れ』という言葉を幾度となく使つてきました。その中には、相手を、先生と同じ気持ちにさせたことが何度もあつたのだと気づかされ、愕然としました。お話をきかせていていただくことは、とてもありがたいことです。私自身が「もうこれ以上頑張れない」ほどの経験をしていなくとも、話し手の気持ちに共感することができ、自己を顧み、過ちに気づかせていただけるのですから。(文責 坊守)